

2024 優駿エッセイ賞

次席 (GII)
受賞作

日本男児は走っているか？

久保田 喬亮



受賞のことば

昨年の同賞は一次審査敗退。今年も駄目だったら色々諦める頃合いかな、と考えていました。なので今回次席の栄誉を授かったことは、「もう少しだけ、物書く人生から降りずに足掻いてヨシ」という啓示だと勝手に思い込みます。取りあえず掲載号を買って、親類縁者友人知人同僚に配りまくって、鬱陶しいほど自慢します。賞金で何か奢れと言われたら、潔く逃げよう。

競馬を好きで良かった。ありがとうございました。

プロフィール
東京生まれ静岡育ち。池添、ルメール両騎手と同年。平均アクセス数3程度の競馬ブログを飽きずに20年以上続けている。たって平凡な人間です。物を書く仕事はたまに。普段は物を配達して暮らしています。

「なんか、日本の馬がいるみたいなんですけど、知っています？」

すっかりたまり場となっていた宿の喫煙所で、ミツル君がふいに聞いてきた。「その顔は、やつぱり知らないみたいですね」。ミツル君はしたり顔を浮かべる。彼はフェンシング修業のために単身ハンガリーにやってきた変わり者だった。旅の途中で様々な日本人に会ったが、そのほとんどは世界中を大きなリュックを背負って放浪するバックパッカーだった。出会ってはすぐ別れるが基本。旅する者同士で話は盛り上がるが、仲良くなるには時間が少なすぎた。

そんな中、ミツル君は旅人ではなかった。一つの目的だけを持って、ハンガリーにいた。私もバックパッカーだったが、一応目的があった。それは「世界の競馬場を巡る」こと。意気揚々と始めた旅も半ばに差し掛かり、ちよつと疲れた時分に訪れたのがハンガリー。アメリカやイギリスに比べて、異常に物価が安いこともあって、しばらく滞在して帳尻を合わせようと考えていた。

時間は関係を作る。自然、ミツル君とは仲良くなった。個人的にはどこに行ったあそこが良かったというバックパッカー特有の話には飽きていたし、フェンシングという全く縁のなかつたスポーツに打ち込む彼の

話は興味深かった。彼は彼で、バックパッカーらしくらぬ私のことは新鮮だったようで、よくつるんで出かけた。

その過程で、もちろん競馬の話もあれこれしたが、彼の反応は「ハンガリーにも競馬場があるみたいですね」程度。別段、盛り上がることはなかった。だから、彼から馬の話が出て驚いたのである。

「フェンシング仲間にも競馬好きがいるんです。それに日本から競馬をやりに来ている人がいるって話をしたら面白がつて。教えてくれたんです、日本生まれの馬がいるって」

彼は何でもないことのようにいったが、私は心拍数の上昇を感じた。日本で生まれた馬？ ハンガリーに？ 遠征？ 様々な疑問が渦巻く。

「詳しくは分からないですけど、とにかく日本で生まれた馬で、ハンガリーで走っているっていつてました」

——ハンガリー競馬で走る日本産馬
自分だけだつたらそんなニッチな情報を掴めたかどうか。ここまでの旅で痛感したのは、「行けばなんとかなる」の精神だけでは何ともならないということ。観るべきものを観られず、行けるはずだった場所に行けず、よく分からないまま何となく雰囲気だけは味わった、という画竜点睛を欠くような道程だつた。

その場にいたからこそ味わえた競馬。出会えた馬。幸運。それこそが、私が欲していたものではなかつたか。「馬の名前は聞いた？」

ミツル君は何かを思い出したように、にやりと口角を上げる。「冗談みたいな名前なんですけど……」。もつたいぶつて、タバコを大きく吸い込む。「ニッポンボーイっていうらしいです」

ハンガリー競馬について知っていることは少ない。ジャパンカップにハンガリーの馬が出走したことはないし、ハンガリー産の馬が日本で走ったという話も聞いたことはない。お世辞にも競馬先進国とはいえず、正直一八〇〇年代に活躍した伝説の名馬キンチュムがそのままハンガリー競馬の語るべきすべてだつた。

一体、ニッポンボーイとはどんな馬なのだろうか。ダメ元で大手検索サイトを使って調べてみたが、やはり関係ありそうなサイトはヒットしない。ミツル君の友人に話を繋いでもらうことも考えたが、どうやらその友人も一旦母国に戻ってしまったそうなので、会うことも叶わず。結局、ハンガリー競馬協会のサイトを虱潰しに調べた。なかなかつかなかった。

読めないのは承知の上だつたが、見慣れない文字列を延々と眺めるのは苦行だつた。アルファベットの横

や上にある「」や「」がどうにも気色悪い。単語もいちいち分からない。英語でいいだろ、と独り言が増える。

そして、文字酔いともいえるべき状態でページを繰り続けること一週間。もしかして騙されていたのかと頭をよぎった頃、ついにニッポンボーイの名前を見つけた。本当にいた。的中した特大万馬券のオッズを確認するような緊張感。震える手でその名前をクリックする。血統表が表れた。

一瞬、戸惑う。父名の後ろにフランスを示す(FR)、母名にはスペインを意味する(SPA)と記されていたからである。「別馬なのか……」。落胆しながら文字を追う。HEL……SSI……O? え、あ、エリシオだ。思わず膝を打った。当時すでに北アイルランドに売却されていたが、ニッポンボーイが生産された二〇〇一年時はまだ日本で種牡馬をやっていた。母のNEWVERTは知らない馬だったが、日本産馬と判明すれば調べようがある。

日本競馬の情報サイト・netkeibaのデータベースで「NEWVERT」と検索する。ニューヴェールと読むらしい。産駒はただ二頭。そこにニッポンボーイの名はなく、ただ「ニューヴェールの二〇〇一」となっていた。父はエリシオ、生産は白老ファーム。黒鹿毛の牡馬で、兄弟姉妹はいない。幼駒時代の写真はなく、ただ一つの書き込みすらなかった。有益と呼べる情報はほぼなかったが、確かにニッポンボーイはいたのだ。誰に注目されるでもなく、ひっそりと海を渡り、走り続ける日本男児。何となく自分と重なる境遇に勝手に共感を覚える。やっと見つけた。次は実際に観に行こう。旅が少しだけ動き出す。

メインレースが終わり、観客が一気に引いたキンチエムパーク競馬場、初夏。芝一九〇〇メートルのハンデ

戦。八頭立てのレースに、ニッポンボーイの名前があった。驚くべきはそのハンデ差。最軽量馬が五〇キロなのに対し、ニッポンボーイが背負うハンデは六三キロだった。日本ではありえない。イクイノックスと未勝利馬が走ったとしても、こんなハンデ差にはなるまい。そもそも、こんな酷量を背負って馬は大丈夫なのだろうか。それほど実力差があるようにも思えない……。さらに驚いたのはオッズである。私が確認した時点でのニッポンボーイは単勝三百倍の最低人気。儲けるつもりはなく、応援のつもりで四百円程度の単複を買ったのだが、その直後オッズが一気に下がり、何と一番人気になってしまったのである。

いくらメインレース後の平場のレースとはいえ、ただか数百円でここまでオッズが変わるものだろうか。「もしかして誰も馬券を買っていないのか」と周囲を見渡すと、一応馬券オヤジらしき人たちの姿がチラホラ。券売所のスタッフも忙しく動いている。謎だらけだった。

ゲートが開くと、ニッポンボーイがスタートダッシュを決める。内枠を利用してハナを叩いた。「逃げ馬なのか?」と思ったが、ただスタートが良かっただけだった。外から来た軽量馬にすぐにハナを奪われると、中団に下がる。酷量が響いているのか、追い出しても反応が鈍い。特に見せ場もなく、そのまま五着でゴールしたのだった。

宿に戻ると、喫煙所でミツル君に会った。ニッポンボーイのレースを観てきたことを伝える。「勝ちました?」「負けた。ニッポンボーイも負けたし、俺も馬券で負けまくった」

「僕もです。フェンシングの試合」
みんな揃って負けた。そんな日もある。私たちは無

力で小さく、若かった。近所のスーパーで安酒を買い、苦い気持ちを一気に流し込んだ。

ほどなくして私はハンガリーを離れ、ミツル君とも疎遠になった。結局、ニッポンボーイを観たのもこの一レースだけだった。たまにその動向を調べはしたが、それも次第に疎かになった。記憶には埃ばかりが積もっていた。

二〇二四年。パリオリンピックで、フェンシング日本代表チームが大活躍した。そこにミツル君の姿が……などというドラマチックな展開はないが、ふと思いつききっかけにはなった。連絡先も知らず、どうしようもないけれど。もしかしたら向こうは覚えていないかもしれないが、一人懐かしさが込み上げる。

そしてニッポンボーイ。流石に種牡馬にはなれなかったようで、産駒はいない。その血に触れることなど、今後はないと思っていた。しかし、何の因果か今年の二歳馬にうっすらと血を感じさせる馬が現れたのである。ニッポンボーイの三代母であるAlataを、五代母に持つダニエルローズという馬である。

この血の薄さを持つて親戚とするのはかなり無理筋かもしれない。しかし、この細かい糸すら今まで日本に繋がってこなかったことを考えれば、ニッポンボーイを知る、もしかしたら唯一の身としては感傷的な気分にもなる。ニッポンボーイは確かにいたのだ。

競馬場には久しく行っていない。歳ばかり重ねてフットワークが重くなったか。いやいや、老け込むにはまだ早い。ちょっとだけ無理がきかなくなった身体に鞭打って、ダニエルローズのデビュー戦は観に行こう。馬券を買って、ゴール前では精一杯叫ぼう。

宙ぶらりんになったニッポンボーイの幻影に出会えることを期待して。